

白著を語る

—私と「美の殿堂」とのかかわり合い

松岡 将



私は、この7月初旬、『ワシントン・ナショナル・ギャラリー参百景』を刊行した。

この本は、近時の私の第1作『松岡二十世とその時代』、第2作『王道楽土・満洲国の「罪と罰」』、第3作『在満少国民望郷紀行』に引き続く、私の近時の第4作目。欧米美術品の宝庫であるワシントン・ナショナル・ギャラリーへの、1970年代の初め以来半世紀近くにもわたる私のささやかな思い入れを、なんとか、とりまとめたものである。そして、改めて考えてみると、この本の誕生も、すべての事象同様、やはり、必然と偶然のないまぜの結果なのであった。

必然面ということ言えば、

私は、1970年代の初め頃のこと、農林水産省から外務省に出向の上、主として日米間の農林水産関係業務を取り扱うため、在ワシントン日本国大使館勤務を命ぜられ、以来、丸4年のアメリカ在勤生活を送ることになったのだが、それが、ことの始まりであった。北海道生まれで小学生時代のほとんどを、外地、満洲大陸で過ごして、戦後1年を経ての内地への引揚げ少年だった私にとって、大陸アメリカ暮らしは、なんとなく、肌に合うところのものだった。そして、生活文化の面をあげれば、さすがにアメリカの首都ワシントンともなれば、美術館、博物館、映画館、音楽会などなど、私がちよっと車を走らせれば、あちこち、いわば身近ですぐに用が

足せたのだった。

そんな暮らしの中にあって、三十代後半でまだ知的好奇心旺盛だった私が、私とほぼ同じ年代である白亜の大理石の美の殿堂——アンドリュー・メロンがその設立を意図し、当時のアメリカ大統領、フランクリン・D・ルーズベルトとアメリカ議会とを

動かしてその同意を得て、1937（昭和12）年7月に、ワシントンの中心のザ・モールの地に建設が開始され、1941（昭和16）年3月に開館された——ワシントン・ナショナル・ギャラリーのとりこになるのには、そう時間はかからなかった。かくして、私的生活面では、



他用のない週末の午後などに車を走らせギャラリーにいつては、当時その展示が開始されて間もないレオナルド・ダ・ビンチの「ジネブラ・デ・ベンチの肖像」を始め、中学、高校時代からそ



の名を聞き及んでいた巨匠たちの諸傑作をも、それこそ選り取り見取りで、ひとり心ゆくまで堪能するのを常としたのだった。他方、公務の面にあっても、日本からの国会議員や政府関係の方々などの同伴接遇にあつて、議員会館や農務省に近接するナショナル・ギャラリーは、アポイントとアポイントとの合間などにご案内するのには、その地の利からして、うってつけの場

所でもあつた。

ナショナル・ギャラリーにあって過ごしたあまたの貴重な時間を含む丸4年のワシントン在勤生活を終えて帰国した私だったが、その後官職を離れてからも、国際関係の仕事に従事して、国際機関の理事会出席のためなど、晩年に至ってもワシントンを訪れる機会が多く、その都度、何とか時間を作つてはギャラリーを訪れ、旧知の諸傑作や新導入の作品に見入るのを常とした。その結果、このような機会に撮りためたギャラリー関連の写真が、数百枚にも及び、いづれ整理をせねばと思いつつ、果たせずにいたのだった。

そんな私が、神戸在の理化学研究所計算科学研究センターにあって、従来のスパコン「京」に替わる新スパコンを「富岳」とする、との命名発表を聞いたのが、昨年の5月の末頃のことだ



あつた。この命名の趣旨としては、葛飾北斎の有名な「富嶽百景」の「富嶽」にちなみ、かつ、新機が従来機「京」の百倍以上の性能を有するが故に「百景」百景」とあやかつて、新機を「富岳」とし、いただき高く裾野広くを指す、とするものであつた。

この命名話をきいた私は、そういうえば「富嶽百景」ならぬ「ナショナル・ギャラリー百景」

だってあるのではないかなと、偶然、思い付き、それが、思い出深いギャラリーの写真在庫の有意的整理の大作業を、昨夏から開始するきっかけとなったのだつた。

このような難しくもあるがやり甲斐もある作業を重ねている中に、その数いつしか当初目標の百は過ぎて、2百はおろか3百に近づいてくるにつれて、その成果を自分一人のものとしておくのは、いかにももったいない、できればこれを多くの人々と共有することはできないかと考え、こころざしある出版社の編集協力を得て、なんとか現在の形での出版にまで、こぎ着けることができたのだつた。最後になるが、世界的なコロナ禍のさなかにあつて本書が、ひとびとの心を静め慰め、そして将来への希望をいだくための一助となるのであれば、著者としてこれに過ぎたる喜びはない。